ハンディキャップ

劣等感

　人類は宇宙を目指し、とうとう火星にも探査機が降り立つ時代だ。いずれ人間も行き来する時代が来るだろう。しかし一方では未だにNASAは月に降り立っていないという疑惑もあるけれど、僕は信じている。きっと、どこかの星には宇宙人が生活していると。彼らもまた、「自分たちの星しか生命体はいない」と学者は語たり、テレビ番組ではUFOの目撃証言やミステリーサークルについて放送して、「本当に宇宙人はいるのか？」と議論が繰り返されているに違いない。
　きっと何もかも同じなのだろう。そう考えるとなんだかおかしくなった。が、しばらくすると、空想の世界からフッと引き戻された。
　僕は病院のベッドから気だるく起きあがり、くすんだ窓の外に広がる分厚い曇り空を見て、いつものようにうんざりした気分になった。
　わかっているのだ。これから何が起きるか。あと三分もしたら、太った看護士の女性が、
「カオル君、もうお時間よ」
　と、偽善者面して点滴をはずしにきて、程なくして似合いもしない黒ヒゲをたくわえた医師の先生がやって来るのだ。
　いつものように軽く診断をした素振りを見せてから、「もう少しの辛抱だよ」と平気で嘘をつく。極めつけは目を細めてニコリと笑ってから、眼鏡越しに僕の目をじっと二秒間見つめ、「また明日ね」と手を握るのだ。患者を勇気づけるのも医師の仕事だと信じて、できるだけコミュニケーションをとろうと努めているこの黒ヒゲを、僕は素直に直視することができない。むしろ無駄な努力だと冷ややかに見つめてさえいる。
　つまりところ、くだらないことの繰り返し。いわゆる吐き出すようなつまらない毎日が、僕には繰り返される。
　僕は生まれたときから体が不自由だ。脳に障害を持っている。生まれてから十五年間、普通の状態でも三日に一度は注射をし続けないといけないし、こうして様態が悪化すると平気で一ヶ月くらいは入院しないといけない。僕は、不自由で、弱くて、こんな自分が嫌で仕方ない。強い劣等感を持っている。
　そのときガチャリとドアが開いて、肥満の看護士がニコニコと笑いながら入ってきた。
「カオル君、もうお時間よ」
　わかっているよ、この馬鹿が。
　僕は決められた動きしかできないロボットのように機械的に腕を差し出して、点滴の針を抜いてもらう。
　痛い、針を抜くときには激痛が走る。この看護士、体も大きいが作業も大きい。おおざっぱというか、大胆というか、同じような意味だが、けして優しくないということだ。当たり前ながら本人には自覚がない。
　それどころか、看護士長をしているためか、自分が一番の力量だと勘違いしているのだろう。四十才を過ぎても結婚のあてもないような彼女には仕事だけが自信なのだろう。
　勘違いをしているような彼女を見ていると嫌でも気づく。きっと、あらゆる錯覚をみんなどこかに持っているのだろうけど、特にこの医療の世界には多いような気がする。人を助けたい、人の役に立ちたいといった類の高尚な志を持った人ほど、自分の中の錯覚に酔いしれている一面があるような気がする。僕の目が曇っているだけなのかもしれないけれども。
「カオル君、今日お母さん来ないだって。寂しいよね。じゃまた来るから」
　ガチャン、乱暴に扉から出ていった。もっと丁寧に閉めて欲しいものだ、ここは僕一人じゃな

いのだから。
「よう、カオル君、今日はお母さん来ないのか」
　僕の隣のベッドにいるのは唯一の同居人の、おじいさんだ。一般に何歳からおじいさんになるかわからないけれど、もうとっくに七十才は越えているだろう。
「そうみたいですね」
　僕も笑って答えると、おじいさんは残念そうにため息をつく。このおじいさんは、僕の母と仲がいいのだ。
　もうこのおじいさんとも二週間くらい一緒にいるのだが、不思議なことに一度もお見舞いに来る人を見たことがない。だからいつも孤独で、僕の母と話をするのがとてもうれしいのだと思う。
「カオルくんはいいお母さんがいていいなぁ」
　不意におじいさんが僕の方を向いてに呟く。おじいさんは複雑な顔をしていた。なんと言うか、子どものように本当に弱々しくて純粋な顔と表現したらいいのだろうか。
　僕は無意識に愛想笑いをしていた。おじいさんもやがていつものようなニコニコ顔に戻っていたので、それ以上深くは考えなかった。
「おうカオル君、ヒゲがやってきたようじゃ」
　おじいさんが目線で扉の方を促した。

相撲と、違和感

　偽善者のやせこけた黒ヒゲが帰ったあと、僕はちょっと眠ってしまった。病院内の暖かさに、僕は誘われたのかもしれない。
　ハッと目が覚めた時には、もう夕方で、おじいさんが相撲を熱心に観戦している。僕たち二人には特に支障がないということで、部屋にはテレビが置いてあるのだ。
　僕はほとんど見ないのだが、おじいさんの方は相撲と歌謡番組が好きで、こうしてかじりつくように見入るのである。相撲はまだしも、歌謡番組と言っても、最近の若者の流行歌であるから驚きなのだ。
「アッ、カオル君、起こしてしまったか。いやー、我慢しようかと思ったのじゃが、今日は横綱と大関が全勝をかけて戦うからのぉ」
「ちょうど今、起きたのですよ。別に気にしないでくださいよ。あっ、結びの一番じゃないですか」
「おおっ」
　それっきりおじいさんは相撲の方に釘付けになった。本当にこのおじいさんは時として子どものような優しい目をする。大先輩に向かって失礼かもしれないけれど、この人は本当に心がきれいな人だと常々思うのだ。
　僕のような子供にも、こうして対等に口を利いてくれて、全然気を遣う必要がない。
「おっしゃー」
　おじいさんがうれしそうな横顔が見えた。あの調子なら、応援している大関が勝ったのだろう。これで明日の千秋楽は西の横綱と、さっきの大関の勝負になるはずである。
　相撲放送が終わってもなお興奮さめやらぬようにガッツポーズまでしている心底うれしそうなおじいさん顔を見ると、僕もなんだかうれしくなった。いや、正確にいうと、心が安らいだ。

　僕は十時の消灯の後、布団の中でこの小さな部屋の薄汚れた灰色の天井を見つめていた。横ではおじいさんが気持ちよさそうに寝息をたてている。そんな安らかな寝顔を見ていると、なぜこの人がこんなところにいるのかと疑問に思えてくる。
　一見はどこも悪くないように見えるからだ。もちろん僕だって他人から見れば、健康そうに見えるかもしれない。けっきょく他人には理解しきれない領域はあるのだろう。
　考えてみると・・・、僕はじっと考えた。
　正直いって僕はひねくれてしまっていた。劣等感の固まりで、ヘド吐き捨てたくなるような現実がたまらなく嫌だ。世界を憎んでいるし、生まれてきたことも、生んだ親も、病院の先生さえも憎しみの太陽だ。しかし他人よりも何よりも自分の存在が、最も憎い。
　弱い自分が嫌で仕方なく、だから目に映るものすべてが僕には目障りで、むかついた。
　でも・・・このおじいさんと一緒にこの薄汚い部屋で暮らすようになって、僕の心には変化があるような気がした。もちろん、そんなこと今まで一度も考えたことなかったし、現に今日だってデブ看護士長や黒ヒゲには特別に良い感情はわかなかったのだから。
　しかし、である。相撲を見ているおじいさんを見ていて、何かが、心の中で響いたような気がしたのだ。違和感とでも言うべきか、何か特別な感情が心に広がったような気がした。それは温もりと表現できようか、僕が求めているもののような気がした。
　僕は優しくなれるような気がした。僕の傷ついた心と曇った目で感じとるこの世の中の光に、なんだか前向きにうなずけるような、希望がもてるようなそんな気がしたのだ。

　疲れているのかもしれないな。僕はいつものように布団に潜り込み、やがて深い眠りについた・・・

母の人生

　翌朝、目が覚めて最初に目に映ったのは、母の涙ぐんだ顔だった。いや、寝ぼけまなこかつ薄目で見ていたからさだかではないのだが。と、こう弁解したのは、次の瞬間、僕がパチリと目を見開いたときに、母はニコニコといわんばかりの笑みをもらしていたからだ。彼女は僕と違った大きな目を持ち、年齢より童顔である。今でも母を独身だと思って近寄ってくる男もいるくらいだから、世間的には美人の部類に入るだろう。おそらくこの弾けんばかりの笑顔に、誰も心を奪われるのではないだろうか、そう、おじいさんのように・・・。けれど僕には母の笑顔を素直に見つめることができない。
　僕はどうでもいいことだと思い、壁の掛け時計を見ると八時を回ったところだった。
　昨日はちょっと考え事をしていたため遅くに寝付いたせいか、いつもより一時間ぐらい遅く起きたことになるわけで、そのため仕事前の母にのぞき込まれる格好になったようだ。
　静かな朝だった。母がコツコツと上品な足音をさせながら、花瓶の水を換えに行った時に、ふと僕は母の顔にしわが増えたような気がした。もう四十歳も後半にさしかかっているわけだから、当たり前といえば当たり前なのかもしれない。だが、おそらく今のように仕事と病院を行き来しないといけない余裕のない生活が、確実に母の体をむしばんでいるようで、僕は母には同情した。
　今まではこんな気持ちになったことはなかったのに・・・。

　母は、僕を三十歳で出産した。従来体の弱かった母は相当な難産で、母子ともにとても危険な状態だったらしい。当時、母の出産に研修医として同席していたのが今の僕の担当医のヒゲで、この話はヒゲから聞いたのだ。
　子どもをおろさないと母の体が危険な状態だったらしい。医師もそして研修医のヒゲでさえも、子供をおろすように願っていた。けっきょく医師には自信がなかったとヒゲは言っていたけれど、理論的に考えても子供を産むような状況ではなかったことは想像できた。
　いよいよ母も産気づいて、それを契機に彼女の容態も急変することになる。母の意識がなくなって一時間くらい経った時に、重苦しい病室では一つの決断がされようとしていた。
　「おろして下さいと」と、医師に訴えている父の言葉を、危篤状態のはずの母は涙を流して「お願いです。おろさないで、助けてください」とかすかにつぶやいたらしい。医師も覚悟を決めようとしていた。
　はじめて聞いたときは、まるで三流ドラマのお涙頂戴の三文芝居のようで、にわかに信じられなかった。その後のつき合いで、ヒゲは嘘をつくような人間ではないことがわかったので、僕は多分本当なのだろうと思うようになった。
　結果はとりあえず母子ともに無事だったという意味では成功といえたが、その後のことを考えると母の判断は間違っていたと思う。
　彼女が無理をして僕を生んだ代償は大きく、僕は病弱で生まれて、何より母自身がもう子どもを産めない体になってしまっていた。
　病弱な僕を無理して生んだ母の最初の試練は、僕の手術だった。
　僕の手術は何とか成功し、そんなわけで今も生きているわけだが、とにかく危険な大手術だったらしい。当然、手術費用は莫大なものだったらしく、父はそのまま僕たちを捨てて去ってしまった。これから借金に埋もれて小さくなって生きるような人生に嫌気がしたのだろう。残されたものの悲しみや苦しみが理解できないその程度の男を、僕はひどく憎んでいる。

　その頃、小学生になったばかりの僕でもはっきりわかっていたこと、自分は不幸の子であるということ。
　生まれてこない方がよかった人間だということ。

「カオル昨日は来られなくてゴメンね」
　帰ってきた母は、花瓶の花を変えながら言った。
　僕がいつものように無視していると、隣のおじいさんが悲しそうに目で訴えかけているのが見えて、
「別にいいよ」
　僕がぶっきらぼうではあるが一応口をきくと、母もおじいさんもにっこり笑った。
　このように僕と母の親子の関係は、僕の一方的な拒絶によってねじれ曲がっていることを知っているおじいさんは、何かしらこういったときに気を遣うのである。
　僕は母を憎んでいる。いや、母が僕を憎んでいるから、僕はその上から母を憎んでいるのだ。母の人生は僕によって狂ってしまった。母は僕を生んで後悔していることだろう。彼女の幸福は僕が奪い取ってしまったから、そう思われても仕方ないと思いながらも、反面やっぱり反発してしまう。僕だって生まれたくて生まれたわけではないのだし。
　とにかく僕はそういった事実がたまらなく嫌で、笑っている母は嘘笑いに見えたし、怒っている母からは憎しみを感じとった。
　すべては仕方ないかもしれない。
　けっきょく僕と母はかみ合わない歯車のようなものなのかもしれない。その狭間で不幸は量産されてゆく。ゆっくりとだけど確実に僕は心を閉ざし、いわゆるかわいくない子供になっていた。
　ついでに言うと、僕は今までの人生で生きていてよかったと思ったことは、ただの一度もない。死ねるものなら死にたいと願い続けている人生だった。
　それは退屈なもので、いつも不安に満ちあふれている。

珍客の訪問

母が病院を後にしてしばらくして、ちょうど九時を回ったあたりで、僕たちの病室に珍客が訪れた。
それは初めておじいさんの面会に来た人であった。三十歳をちょっと過ぎたくらいの、ガッチリした体格の、角刈りの男だった。風貌は恐ろしく、特に目が鋭くつり上がっており、みるからに「招かれざる客」のようで、僕はとっさに病室を出た。
とっさにそうした方がいいと悟ったのだ。

何をやるともなくやってきた休憩室は退屈にあふれていた。僕のほかには点滴をしながら時間をつぶしている、見るからに健康そうな若い青年だった。彼は僕を一瞬だけ見たけれど、特に興味もないというように手元の雑誌に目を落とした。まるで感情が希薄になっている若者そのものの対応なのかもしれないけれど、この方がお互いに楽なのだから仕方ない。
特にこの病院という空間では感情が落ち込む。お互いに低くなった感情を慰め合うのも一つの方法だけれど、引き込まれないようにしないといけない。相手のペースに。
僕にしても他人との関係などはどうでもよかったので、挨拶もせずに散々している週刊誌の一冊を手に取った。
雑誌をペラペラめくっても、世の中はどうでもいいことにあふれかえっているだけで、すぐに飽きて窓の方に目を向けた。
まばらに、通学途中の学生が見える。学生服の上からコートを羽織った人が多いのは、外が寒いことを物語っている。病室に縮こまっているだけの僕には、ちょっと季節感が麻痺するのである。今日は・・・そうだ、確か、三月初めくらいだったっけ？
目を横にそらすと、車が二台止まっていて、赤と白の軽自動車だが、おばさんが道の脇で立ち話をしていた。平和なものだ。
あと目に付くものといったら、牧場だ。牛の牧場があって、白と黒柄のホルスタインの牛が二頭だけ見えた。
そのまま見入っていると、真っ黒の牛が小屋から顔を出した。あの牛は、肉牛だろうか？
じきに殺されて食肉にされてしまうのだろうと考えると、ちょっと同情した。
いや、同じことなのかもしれない。僕はすぐに思い至った。
あの牛たちはどちらにしても死ぬまで人間の奴隷なのだから。
日々黙々と淡々と生きている牛たちは、何で生まれてきたのか疑問に思わないのだろうか？
どうして人間たちに反抗しないのだろうか？
それとも知っているのだろうか、どちらにしても同じだということを。それとも、諦めているのだろうか、自分の生い立ちに・・・。
それだったら自分に似ているな、と思った。生まれたから仕方なく生きているのなら。
「あらカオル君」
デブ看護士長が、僕を視界にとらえて、すぐに病室に戻るように促した。
僕は例の男が帰っていく後ろ姿を確認して廊下を歩き始めた。男の後ろ姿はまるで氷な冷たさを感じた。威圧感というか、邪悪なオーラが漂っていた。
僕は自分のベッドに帰って、若い看護士に点滴をつけてもらって寝ころんだ。
横のおじいさんは僕に背を向けた格好で、窓の方を見ているか、寝ているかもわからなかったが、怪我もないようで五体満足そうなので安心した。

けっきょく、この日おじいさんと話すことはなかった。
おじいさんは楽しみにしていた大相撲千秋楽も見なかった。

「カオル君・・・」
　僕がおじいさんの声で目を覚ましたのは、夜中の一時前だった。暗い病室でも、おじいさんがこちらに体を向けて、僕の方を見つめていることがわかった。
「ちょっとすまんのう」
　静かな病室であってもやっと拾い取れるくらいの、か細い声だった。
「いいんですよ」
　できるだけ努めて優しく返事をした。
「今日、いやもう昨日のことだが、見たじゃろ、わしの息子を」
「あっ、はい」
「どう思った？」
「いや、ちょっと変わった・・・その・・・」
　僕は適切な言葉を避けていた。
「ヤクザなのじゃ」
　やっぱりそうでしたか、とも言えるはずもなくて、ただただ重い沈黙が流れた。
「もう、もう出すものは何もないのに・・・」
　おじいさんが最後の言葉を吐き出すように漏らして、それっきり、子どものように泣き出した。おそらく僕が寝ているときは気を遣って声を殺して泣いていたのだろうが、今では我慢していたものが、一気にこらえられなくなったのだろう。
　僕が今まで見てきたどんな涙よりも重苦しかった。ただただ気まずい雰囲気をどうすることもできず、困った。
　永遠に続くような気がしたやりきれない時間は、収束するまでにどれくらいたったのもわからないくらいだった。ほんのわずかの時間だったはずなのに、長距離走者が目指すゴールのように僕のような人間にはかけ離れた長さに感じだ。
　やがて、おじいさんの泣き声が寝息に変わったのを確かめた僕は、体を仰向けにして、薄汚れた天井を見つめて、おじいさんのことを考えているうちに目頭が熱くなるものを覚えた。
　しかしこのように落ち込んだ状況に至っても、僕は涙が出ないことに驚きもした。
　涙が出ない理由は、思い返すのも嫌な記憶が僕の脳裏に繰り返される。僕は父を思い出していた。この世でもっとも憎んでいる男を、涙の記憶とともに思い出していた。

「かわいくない子だ」
　僕を睨みつける父の目には感情が希薄だった。まるで道路に落ちている空き缶くらいにしか感じてないようだった。薄汚れたアパートの一室で僕はひどい汗をかいていた。
　僕は三年前に父を訪ねたことがあった。母にはもちろん内緒で、夏休みの一日だった。ちょうど母がそのときに無理がたたってか突然倒れて、病院に入院することになったのだ。
　僕は一週間もの間、母の熱が四十度から下がらないのを見て、もう駄目だろうと考えるようになっていた。母が時々意識を取り戻したときに僕に対して「すまなかったと」というようなことをしきりにうわごとでつぶやいていたので、ますます駄目だと思うようになった。
　僕は自分よりも母が先に死ぬことを想像したこともなかったから、ひどく焦っていた。
　黒ヒゲは僕に「ただの風邪だから大丈夫」と勇気づけたが、僕には信じられなかった。たとえ風邪だとしても四十度を超える熱を出した人間は死ぬ確率があることも知っていた。ましてや一

週間も続けば、いよいよ覚悟を決めないといけないと思ってきていた。
　ちょうど一週間が経ったときに、僕は黒ヒゲに呼ばれた。
「きっと今週が山場だと思うから、親族の人を呼んでくれないか」
　僕は嘘を言って誤魔化していた黒ヒゲを責めることもなく、素直にうなずいた。
　しかし頼れる親族がいないのも母の不幸な身の上のためだった。母の両親は若くして他界しており、どう考えても父しか思い浮かばなかった。
　父に恨みを抱いていた僕にとって、どんなことがあっても頼ることのできない人間だった。
　けれど母の死を目前に控えているはずなのに、とても綺麗な顔を見ていると僕の屈折したプライドは捨てるべきだと気づいた。僕たちを捨てた父も、心の中できっと僕たちが気になっている、ましてや母のことは結婚していた女性だし、今でも特別な感情があると信じていた。
　しかしこの判断が決定的に甘かったことを僕は目の前の父を見て痛感した。
「お願いだから、母さんはもう死にそうだから、最後に病院に行ってほしい」
　僕は恥も捨てて必死に頼み込んでいた。
「何度も言わせるな。あいつは俺よりお前をとったのだ。今更、会う気はない」
　父であるはずの男は、狐のようなつり上がった目で、そう、この前おじいさんのところに面会に来た男のような目で、僕を睨み付ける。
「この通りお願いだから、一度でいいから病院に来てほしいのだ」
　悔し涙が次から次へと頬を伝っていた。何を言っても響かない無力感。
　しまいには、僕は胸倉をつかまれて、部屋から強制的に追い出されてしまった。
　玄関の外で尻餅をついて転がっている僕に、父は一言、
「この疫病神が」
　と、つぶやいて冷たく扉を閉ざした。立ち上がる力も起きずに、僕は唖然としていた。セミの鳴き声がしたような気がしたけれど、このときの記憶はほとんどない。
　僕はきっとこのときに涙を失ってしまっていた。

明さんの恋

「よお、少年、元気しとるか」
　突然声がした方を向くと、この前、休憩室で見かけた青年が僕の方を見つめていた。相変わらず手には点滴をぶら下げながら。ヤクザの一件から病室に居づらくなった僕は、時々逃げるように休憩室に行くようになっていて、まさに会ったのだ。
「ええ」
　僕はいぶかしい目で青年を見た。青年は二十代に見え、髪が短いのが印象的だった。人の良さそうな大きな目と、突き抜けるような明るい声が印象だった。
「俺、芹沢明。よろしく」
「は、はぁ。僕はカオルです」
　青年が差し出した手に僕は手をさしのべた。
「お前、この前もいたけど、長いのか？」
「いえ。時々入院が必要なだけなので、まだ三週間くらいです」
「そうか。大変やな」
「せ、芹沢さんは？」
「ええよ、明って呼んでくれよ。俺は二ヶ月になるかなぁ。毎日こうして点滴だから嫌になってしまうよ」
「そんな呼び方はできません、じゃ明さんって呼びます」
「ああ、ええよ」
　明さんには独特の関西弁なまりがあった。
　僕は明さんの底抜けに明るいところに違和感を持ちながらも、けっこううち解けて話すようになっていた。
「どうして暗い顔をしているのだ、カオルは」
「こんな顔なので・・・」
「いや違うよ。多分な。俺思うのだけど、楽しく生きても、暗く生きても、同じ一生だろ。だったら楽しい気持ちで生きようってさ。俗に言うポジティブシンキングや」
「ぽじてぃぶ？」
「あ、悪い悪い。要は前向きに考えるってことが肝心や、ってことだ」
「はぁ」
「こんなところに長くいるとな、誰も気が滅入って暗い顔をしているやろ？　それが良くないよ。明るい顔をしていればきっといいこともあるよ」
「明さんはいいことあったの？」
「ここでか？」
　明さんはしばらく考えてから、「内緒やで」と口に一本指を立てて小声で、
「俺、好きな子ができたんだ」
「というと？」
「看護婦の明智さんっているだろう？　たぶんお前の病室あたりによく行っている」
「ああ、よく知っています」
　僕は少しだけびっくりした。明智さんは主におじいさんのところに来ている若い看護士さんだ。性格が朗らかでいつもニコニコしているのが印象的な女性。けっして美人ではないのだけど、性格は綺麗な人である。

「人は恋をすると人生前向きになれるんだぜ。お前も直にわかるよ」
　明さんはこのように一方的に自分のことを話してから、病室へと戻っていった。
　沈んでいた僕の心がしばし嫌なことを忘れられるような気がした。全く僕と価値観が逆なのだけど、悪い気はしなかった。

夢に向かって生きること

「雲のようにゆっくり生きられると思っていたのになぁ」
　僕と明さんは病院の屋上で空を見つめていた。三月なのに、気持ちよく晴れていたから、四月中頃の気温だった。
「どういう意味です？」
「ほんま、うまくいかん」
　明さんは明らかに元気がないようだったけれど、僕には適切な言葉が浮かばなくてただ黙っているしかなかった。
「ふられてしもうたは」
　この前好きだと言っていた看護士の明智さんに告白したようで、見事に玉砕したということらしい。明さんは短い髪を手で確認するように触って、
「この髪も今日限りだしな」
　と、つぶやいた。
「今日限りって？　禿げるには早いですよね」
　僕はこのときに何かのテレビ番組の罰ゲームのように、負けた人間が頭を丸める姿を思い浮かべていた。明さんの頭を丸めた姿を見て、以外と精悍な顔だから似合うかもと思ったりもしていた。
「ほんま、お前はおもろいやっちゃな」
「はじめて言われました」
「まあ、いろいろあるんよ。俺の場合、脳の方に病気があって、明日手術なんだ。お、言っておくけど、頭が悪いからって意味じゃないからな、ははは」
　普段は悲壮感のかけらも見せない明さんが、このときばかりは切なく見えた。努めて明るく振る舞おうとしている姿が痛々しかった。
「直ったら退院ですね」
「ああ。退院したらやることいっぱいあるからな。俺、今年で二八歳なんだよ。こう見えても」
　どう見えてもそのくらいに見えたけど、あえて明言はしなかった。
「俺な、カオルにだけ言うけど、退院したら会社を創ろうと思っているんだ」
「会社を？」
「そう。内緒やで」
　僕は会社を創るということにイメージはわかなかったけど、とてつもなく難しいことであろうという気はした。
「おいおい、そういう目でみるなよ」
「あ、すみません」
　僕は知らず知らずのうちに同情的な目で見ていたようだ。明さんに限らず病院に長くいて、大きな病気を克服したような人は、世間に出たら何だってできる、死ぬ気になって取り組めるのだからと思うものだと聞いたことがある。
「俺はこう見えてもサラリーマン時代は仕事ようできたんやで。頭も悪くなかったけど、部下からも慕われていたし」
　不思議と明さんが言うことは本当のことだろうなと思った。この人は控えめに言うことはあっても、自分のことを大げさにアピールするような人ではない。
「さっきは雲のように生きるって言っていたのに、どうしてです？」

「わからん。矛盾しとると思う。俺は。ゆっくりと生きたいという気持ちと、生きている間に何か大きなことを成し遂げたいという自分がいる」
「わかる気がします」
「けどな、今回入院してみて気づいたんや。いつでも何かできるわけやないってことがな、先延ばしにしていたらいけないってことが」
「はあ」
「カオルにはまだわからないかもしれんけど、明日死んだとして後悔がないかって考えたときに、やっぱり俺はやれることやってないなって思ったんや。当たり前のことだけど、こういう不自由な思いをして初めて実感したよ」
「明さんならきっと楽しく生きられるような気がします」
「おう、うれしいこと言ってくれるな。なあカオル。ところで、お前には何か夢があるのか」
　僕は唐突な質問にただただ不意をつかれて、とたんに笑顔が消えてしまったのがわかった。
「どっか行きたいところとかあるやろ？　夢って大げさなもんじゃなくてもいいと思う。純粋にどこか行ってみたいってところでも見つければ、きっと楽しくなると思うよ。じっくり考えてみて、俺の手術が終わったら教えてくれよ、これ宿題やで」
　明さんは僕に謎かけるように去っていった。
　僕の行きたいところ。それは・・・。僕は夢もないし生きる希望も見いだせない閉じこもった性格をしていたけれど、唯一行ってみたいところはあった。
　どんなにあがいても手が届かない場所は、広く広がる宇宙だったけれど、あまりに恥ずかしくて即答はできなかった。

「えっ」
　明智さんはいつも以上に大きな目で驚いたように僕の方を見た。
「芹沢明さん。あの元気なお兄さん」
「ああ」
　明智さんは一瞬考えた素振りをして、
「あまり知らない人だから、わからない」
　明らかにとぼけた雰囲気でそそくさと病室を逃げるように出て行った。
　おじいさんのところに来た明智さんが、いつもより暗い顔をしていたのでてっきり明さんの話を引きずっていると思い、何も考えずに尋ねてしまったのだ。かわいそうに隠せないくらい動揺したところを見ると、かなり図星なのだろう。
　僕はのんびりと天井に目をやるように仰向けになって、ごろりと寝ころんでいた。体調もよかったので、あれこれと考えがよく浮かんでくる。
　病室も明るくて、すでに花粉を放っているような大きな杉の木が窓の外から綺麗に映る。太陽が近いような躍動感がある昼下がりだった。
「ねえ、カオル君」
「えっ」
　僕は突然声をかけられたので、本当にびっくりして声のしたほう、扉の方に目をやると明智さんが僕の方を見つめ手招きをしていた。
「なんでしょうか」
　僕は誘われるまま、休憩室の方へ歩いていった。

「あのう、そのう」
　明智さんは僕の隣でもぞもぞと落ち着きのない感じで座っていた。近くで見れば見るほどに純粋な顔をしていて、地味だけどほのぼのと綺麗な白爪草が思い浮かぶ。
「明さんのことですね」
「え、ええ」
　明智さんは口を一文字に結んでいたけれど、意を決したように開いた。
「カオル君、芹沢さんを知っているの？」
「ええ。たまにここで話をするので」
「そう」
「僕、聞いてしまいました」
「やっぱりそうなの」
　明智さんは僕の方をじっくりと見つめるように、
「私ひどいこと言っちゃったかしら」
　と、独り言のようにつぶやいた。
「それはわかりませんが、正直に気持ちを伝えたのならきっとわかってくれると思いますよ。明さんはいい人なので」
「そう」
　恋は必ずうまくいく保証はどこにもないのだよと、黒ヒゲが僕に語ったことがあったけど、明さんもまさにそのような状態だったのだろう。

「実はね、私、前に結婚していたことがあって。つまりバツイチなのよ、こう見えても。仕事がんばりすぎちゃって、けっきょく家庭がうまくいかなくて。ごめんね、こんな暗い話をして」
「いえ」
「だから、あの人とは不釣り合いだと思ったの。やっぱり、すごくいい人だし。きっとショック受けるなと思うと、素直に気持ち受けられなかったの」
　思いもしない展開だったけれど、僕は素直に自分の気持ちを話そうとした。
「それでも明さんはきっと幸せになる方法、いろいろ考えて、いい形で解決していってくれると思います」
「そうよね。私、怖かった。何もかも失うのが。もう」
「もう？」
「一人でいた方が楽だとずっと思っていたから。人を好きになるのをもう止めようと思っていたの。でも、やっぱり違うのだって昨日気づいて」
「じゃあ、明さんのことを？」
　明智さんは恥ずかしそうにうなずいて見せた。明さんと明智さんは両思いだったのか。
「明さん、今日は？」
「手術中。大変な手術らしいの。私、考え出したらいても経ってもいられなくなって。もう三時間もかかっているし、もしものことがあったら私どうしようかって思って」
「明さんはきっと元気にまた戻ってきますよ」
「そうね。そしたらきっちりと自分の気持ち話そうと思って」
「いいと思います」
　明智さんがニコリと笑って、ありがとうカオル君と言って席を立った。きっととても良い形でカップルになれるだろうなと、翼でも生えたように躍動する小さな後ろ姿を見て自然とほほえみがこぼれてくる。

　僕がやりきれない気持ちに陥ったのはそれから三日後のことだった。相変わらずいつもの通りありふれた日常が繰り返されるはずだった。デブ看護士長の点滴が終わり、黒ヒゲの診察に来るまでの間に、僕は半開きになった扉を横切る車いすの男性を見かけた。
　まさに、明さんだったが、車いすを引いているのはこれまた明智さんだったものだから、僕は喜々として脱兎のごとく廊下に飛び出た。
「明さん、明智さん」
　車いすを引いていた明智さんの足が止まって、僕の方を振り向いた顔はまさに憔悴仕切っているといった顔であった。まるで何日も徹夜をした後のような。ふと母のつらそうにしている時期に重なった。
「カオル君」
　か細い声で僕を見つめている明智さんからは何か不吉な気配は漂っていた。けれども後になって考えればそのように感じたのであって、このときの僕にはまるで楽観的な気持ちだったものだから、変わり果てた明さんを見たときの驚きは想像を超えるものであった。
「明さん」
　僕は頭に包帯をぐるぐる巻きにしている明さんを見たのだが、顔にまるでしまりがないのにおどろいた。よく見ると口からはだらしなくよだれが垂れている。
「手術、失敗したみたいで」
　明智さんは伏し目がちに明さんの足下のあたりを見つめていた。まるで顔を見るのがつらいという感じであった。僕には状況がすぐに飲み込めなかったのだけど、明さんの様子をまじまじと見るとようやく事態が飲み込めた。
　子供のようにだらしなく放心状態になっている明さんは正気を失っていた。言葉も話せないようで、意味不明の文言をブツブツとつぶやいているだけだった。僕の知っている明さんではなかった。
「先生は助かっただけでも幸運だったと言うけれど、私はどうしても受け入れられなくて」
　僕はこの間の明智さんを思い出して言葉も出なかった。
「けれどこれは私の責任だろうって思えて。私があのときに彼の気持ちを素直に受け入れていればこんなことにはならなかった気がしてならないの」
　あまりにも夢遊病者的と言えばよいのだろうか。
「助かるか助からないか、紙一重のところで一番重要なのは精神力なのよ、生きたいと思う精神力みたいなものが、私のせいでなくなっていたのかなと思えて。彼、落ち込んで、知らず知らずのうちに死を望んで手術台に入ったのではないかと思ったりして。私はどう償ったらよいのかわからなくて」
「そ、それは」
　僕もやっと声を出すことができた。
「あまりにも自分に厳しすぎます。明さんはどんなときでも夢を持って生きたいと思っていたと思うし、何より大好きな明智さんに心配をかけたくないはずです」
「ありがと、カオル君。あなたはやさしい子」
「いえ」
「カオル君、もうじき退院だったわね。また時間があったら、お見舞いに来てあげて下さいね。芹沢さん、カオル君と仲が良かったみたいだからきっと喜ぶと思うし」

「はい、もちろん」
　僕は自分の気持ちを隠すように明るく振る舞おうとしていた。
「じゃあまたね」、と僕に背を向けて歩き出す明智さん、彼女が押している車いすの上の明さん。白茶けた廊下に、黒っぽい死相がはっきりと目に見えるような気がした。
　カラカラという車いすの車輪の音が僕の頭の中でしばらく消えなかった。カラカラと人生は進んでゆく、カラカラと単純ではなく、すべてを飲み込むようにカラカラと。

　僕は毎日、いろいろ考えた。もちろんおじいさんと明さんのことばかり考えていた。
　おじいさんとの関係はあれ以来何もなかったかのように平然としていた。いや、微妙には違っていたかもしれないが、お互いに知らず知らずのうちに気を遣っているのだろう。でも、表向きは、何もかも今までと同じ退屈な日々であっても、僕の心は全く違っていた。
　こんな風に、内面と外面のギャップを埋めることにあくせくしながら、日々は過ぎて行き、僕が入院してから、一ヶ月が経った。
　それは、退院する日が来たということである。
「おや、カオルくん、もう退院か」
　夕方の退院のために荷物をまとめていた僕は、こくりと頷いておじいさんの顔を見た。
「またすぐに戻ってきますから」
「悲しくなるのう」
「すぐですよ。また相撲がはじまる頃、やってきますから」
「おう、そうか。今度こそ、大関に優勝してもらわんとな」
　そこまで会話が進んだとき、病室のドアがガチャリと開き、デブ看護士長がドスリと入ってきた。
「あら、カオルくん、退院のお準備。えらいわね。じゃ、最後の点滴をするわよ」
　相変わらず下手な点滴に、痛みをこらえて、これが最後かと思い清々もした。デブ看護士長にほめられてもちっともうれしくない。僕は、彼女が出ていってから、じっと寝ころんで、ぼんやりしていた。
　明日から今度は、中学校が始まる。つまらないだけの学校生活のことを考えるとうんざりした。
　僕の席は一番前の窓際にあって、窓の外には校庭が見えて、その向こう側にはコンビニがある。たったこれだけの言葉で描写できるくらい、たったそれくらいなものだ。特に見ていても何も感情も働かない。けれど僕は窓の外ばかり見ている。他に目に入れたくないものが多いからだろう。現実という姿は僕には痛い。
　教師は僕を特別扱いにする。授業では難しい問題を聞くことはまずない。
　テストにしても、どれくらいできが悪くても、「君の場合は仕方ないよ」で片づけてしまう。叱責されることもなければ、居残りもない。むしろ優遇してやっていると勘違いさえしているふしすらあって、要するに救いようがない。
　教師が教師なら、生徒も生徒。みんな表向きは僕にやさしいのだが、いわゆる偽善者だ。
　陰ではきっと、馬鹿にして卑下して優越感に浸っているのだろう。弱いものを見下す、これは学校の中で起こる当然のことだし、言うなれば社会の縮図である。仕方ないことだと僕は思うのだが、頭で考えるほど簡単に割り切れない時もある。
　おしなべて、このように学校という場所は、僕の息を詰まらせて気分を悪くさせる。くだらないものの代名詞なのである。
　ややあって、ヒゲが入ってきて、最後の診断を行った。ヒゲが帰ったらまた寝ころんで、天井をボーと見てから、眠くなってきて、横向きに体勢を変えて眠りについた。

　夕方、母が服を持ってやってきた。僕はすばやく着替えて、ベッドから降りた。
　おじいさんには丁寧に頭を下げてから、病室を後にした。

　母の後を追うようにして、ヒゲのところにいってお礼を言ってから、帰り廊下であったデブ看護士長にも、思ってもいないのに、
「ありがとうございました」
　と頭を下げた。
「またね～」
　と、ニコニコ脳天気に手を振ったが、うんざりしたから無視した。
　僕は外に出たら、思っていた以上に寒くて一瞬震えた。
「大丈夫？」
　心配そうな母に黙って頷くだけで、車に乗り込んだ。
　病院を後にした僕は、明日からの学校のことを考えて、重い気持ちになった。眠くもなかったので、シートにもたれ掛かって、久しぶりの外の景色を目で追っていた。
　僕の目に映っては消えて、また映る景色は深い眠りから目覚めたシーラカンスのように、現実から離れた存在のように見えた。そこにぶら下がっている自分も、この現実の中の一部だという確信はどこにもなかった・・・

バカの証拠、ハゲトール、おしゃべり

　中学校では、もう二年生も終りだということで、誰しも受験を意識していた。一ヶ月ぶりに帰ってくるとその温度差のようなものが明確にわかる。
　というのも、僕の行っている学校は県下ではけっこう有名な私立中学だったりする。教師をはじめとして保護者や生徒は受験にピリピリしているのだ。
　かくいう僕はというと、高校には行きたくないし行く意味もまるでないから、場違いな存在だ。ただ、母がどうしても高校は入って欲しいと思っているのか、高い学費を払って、私立に入れたのだ。無駄な出費だとつくづく思いつつ、僕は学校に行っている意気地なしだ。
「おい、篠崎、久しぶりだな」
　座っている僕に、挨拶以外に話した初めての人は、天野正吾だった。
　こいつは、活きはいいが、頭は悪い。これだけ休みがちな僕にすら成績で勝てないのだから正真正銘といっていい。あだ名で天野だけにバカ野などと言われているくらいだ。
　これが名前と合わせると「バカの証拠」になるからよくできている。名は人を現すってところか。
　ただし確かに頭は良くないが、それでいて（その為か）性格は他人のことを思いやるという親分肌なところがあって、クラスでも人気は高い。だから、こんなにも明らかに浮いている僕にも、気を遣って話しかけてくれるのである。
「ああ」
　僕が軽く答え、二三取り留めもない会話をしたとき、担任の泉川が入ってきて、あわててバカ野も自分の席に戻った。
　日直の起立、礼、の号令の後、泉川が僕の方を見て、ニヤリと笑ってから、出席をとり始めた。僕の名前はちょっと意識して大きな声で呼んだりするので、むかついたから返事をしなかった。
「おい、篠原いるのか」
　と、僕の顔をじっと見ながら言うので、これ以上バカとつきあいたくないから、小さく返事したら、満足そうにニャと笑った。
　この泉川という男は、二十五歳の新米教師で、もちろんまだ独身だ。顔はまあまあだが、若いくせに髪の毛が相当薄く、恐ろしく危ない額のラインを持っている。
　あだ名はもちろん、ハゲ。それに加えてひょろりと背が高いから、ハゲトール（tall)などと呼ばれている。もちろん、バカ野とは違って、面と向かって呼ばれているわけではないのだが。一応教師だし。
　性格は、よく言えば温厚、悪く言えば弱気で、生徒からは軽く見られがちだ。本人は一生懸命のつもりだろうが、その熱意は理解されないタイプの人間といったところか。経験が乏しいだけに体力だけでがんばろうとしているようなところが痛々しいが、悪い人間ではないので僕はけっこう好きだったりする。
　こんな具合に朝礼が終わった後に、すぐさまハゲトールに職員室に来るように言われた。
　僕はどうせ進路の話だとわかっていたから、またうんざりした。

　ハゲトールのところへ行く途中に、職員室のすぐ前で野上佐知子を見かけた。彼女はおしゃべりでうるさい女である。一年生の時に同じクラスだったから、僕は知っていた。
　彼女は一年生の時に僕が唯一話したことがあるクラスメートの女性だった。ただ単に、彼女が

おしゃべり好きだったため、僕でも話し相手になりえたのだろう。
　顔は、ほっそりしていて、ちょっときつい目をしていて、右目の直ぐ下に泣きぼくろがある。まあ、全体としては整った顔をしているから、もっと口数が減れば男にもてそうな感じである。
　次第に近づいていく彼女への距離で僕は、彼女が窓の外を見ながら泣いているのがわかった。いつも明るい彼女のそんな姿を見たのは初めてだったし、正直僕は混乱した。
　声をかけようかとも思ったが、僕はもともと話すのが苦手だから、何を話していいのかわからないし、もしかしたら彼女は僕を覚えてないかもしれないし、そのように自分でいろいろ言い訳を見つけて、彼女を見ないようにして職員室に逃げ込むように入った。
　卑怯もの！と、もう一人の自分が叫んでいるようで、嫌な気持ちになった。

　ハゲトールの進路講座を静聴してから、「まだわかりません」とポツリと言うと、そろそろ授業が始まるからといってそこで話はいったん終わり、僕は職員室を出た。
　野上佐知子はもういなかった。僕は静かな廊下を歩きながら、彼女が泣くことの不自然さについて考えていた。
　ただ、これが普通なのかもしれない。彼女だって、他人が勝手にレッテルを貼っているだけで、本当は弱々しい十四歳の少女だという一面も持っていてもおかしくない。僕はなんとか忘れようと適当な理由をつけていた。

　僕は昼休みになって、薬を飲んでから、屋上にいた。
　あまり寒いところに行ってはいけないのだが、僕は慣れない授業にものすごく疲れていた。内容もさっぱりなら、雰囲気も息が詰まるように苦しい。
　だから、外の空気でも吸って、景色でも見て、心の休息がとりたかった。もちろん、どうせ教室でも一人で座っているだけだから。
　屋上は思ったよりは寒くなかったが、風はちょっとあった。僕は手すりのところから、校庭を見おろした。誰一人いない校庭はひっそりしていた。
　ぼんやりと眺めていると、ふと自分がここにいるということを忘れてしまいそうな気がした。
　ゆっくりとコンビニの方を見ると、生徒がこそこそ出てきて、キョロキョロとあたりを見渡している。
　校則で学校からの外出はしてはいけないし、もちろんそれがすぐそこのコンビニも例外ではないからだ。僕は目がよい方だけれど、それが誰かまではわからなかったし、実際わかる必要もないから目をその横に向けた。街路樹が軒を連ねていて、白い車が止まっているだけだ。
「おーい、かおるちゃ～ん」
　突然、後ろから人をくったような声がした。すぐに秀才の中山だということはわかった。
「名前で呼ぶなよ、デブ山」
　僕は無愛想に中山の方を見た。中山は頭が良くてクラスでもトップクラスである。かなりいけている頭とはまったく逆の外観は相撲取りのようにぶくぶく太っていて、きつそうなメガネをかけている。要するにどんなに頭が良くても異性からもてることはあり得ないというやつだ。
　こいつがまた、意外にお調子者なところがあって人をからかうのが好きだ。本人に悪気はないのだが、言われた人をむかつかせてしまう。いわゆる損な性格の持ち主でもある。
　しかし、なぜか僕はこのデブ山とは息が合う。不器用なもの通しの波長というものがあるのだろうか、僕は彼の言動にあまりむかつかないし、デブ山自身も僕のことを数少ない話し相手に思っているようだ。
「なあ、おまえ、ハゲトールに何言われたんだ」
　デブ山が僕の隣にドスリと移動してきた。
「別に、どこの高校に行くのかって」
「どう答えたんだよ」
「いいだろ、そんなこと。お前じゃあるまいし、僕は劣等生なんだ」
「そんな言い方するなよ」
「それに」
「それに？」

「僕はどうせそんなに長く生きられないんだ。高校に行っても意味はないよ」
「・・・」
　僕はどうしてこんなこと言うのだろう？わからなかった。
　こんなことを他人には言うべきではないのだ。僕のことで、暗くなったり、同情したりしてもらいたくないのだから。

大きな誤解

　退院してから三日が経って、僕は定期検診のために病院に戻ってきていた。三日といっても、はじめの一日以外は全部早退した。
　気分が悪かったのではない、面倒だったからである。僕が気分が悪いと嘘をつけば、フリーパスで百パーセント早退できるのだ。それがまた、たまらなく嫌だった。人々は僕をまるで国宝の備前焼のようにデリケートに扱おうとする。その実、国宝のような価値もなく、やっていることは、瀕死の魚に水をかけるというような接し方に近いのである。
　そこには愛はない。友情はない。あるのは・・・ただの哀れみだけだ。
　僕はヒゲのところに行って、聴診器をあてられた後、注射を二本打ってもらい、レントゲンをとってから診断を終えて、はれて自由の身になった。後は帰りに薬を貰って帰るだけなのだ。
　すぐに二階のおじいさんのいる部屋に行こうと思った。僕の心を癒せるのは、おじいさんしかいないのである。
　部屋をノックしてから、見慣れた部屋に入った時、僕は違和感を覚えた。
　確かにおじいさんはいた。でも、前と様子が明らかに違っていた。
　ブツブツと独り言をつぶやきながら、うれしそうにテレビを見て手をたたいている。口からはよだれがだらしなく垂れている。
「おじいさん、どうしたの」
　おじいさんは僕が近寄ってもまるで無反応である。ただ同じ動作を繰り返しているだけである。僕はその顔を見てゾッとした。
「無駄だぜ」
　不意に扉が開いて、声がした。声の主は、おじいさんの息子の角刈りのヤクザだった。男は近寄ってきて、
「ボケだよ。ここじゃなんだから、ちょっと外に出ろよ」
　僕は男の後ろについて行くべきか逃げるべきかかなり迷った。彼はヤクザではあるが、わざわざ病院でめったなことはできないと思い、あとを追って病室の外に出た。
　休憩所まで行く間、冷たい男の後ろ姿を見て考えていた。恐怖感で体の動きはぎこちなく、落ちつかなかった。必死に自分を説得しようと試みたがダメだった。
　いくら死んでも後悔のない命だと言い聞かせようとしても、現実として差し迫った恐怖心には勝てなかった。体が内面からほてってきて、全身が汗でベトベトしてきた。手を広げて歩くと、汗でひんやり涼しかった。軽くめまいがした。
　僕は当然、学校のように、逃げ出したかった・・・

　休憩室で男は自動販売機でコーヒーを買って、黒い椅子に深々と座って、男が僕の方をギロリと見た。まるで蛇に睨みつけられたカエルのように、僕は背筋が凍りついたように固まった。
「おい、ちょっと来いよ」
　ドスのきいたような男の声に、僕はロボットのようにぎこちなく歩いて近づく。
「ハハハ、おまえなに固まっているんだよ。そうだ、まさか親父に俺がヤクザだとでも言われたのか？」
　僕はゆっくり頷くと、男はまた愉快そうに笑いコーヒーの蓋をあけてグイッと一口飲んだ。
「失礼な奴だな。俺がヤクザに見えるか？あっ見える？ハハハ。逆だよ、逆。俺はこう見えても警察だ。まったくボケ親父のこと信じやがって。おい、これでジュースでも買って来いよ」

男は僕に百円玉を手渡した。
じっと言葉をかみ砕きながらしばらく考えて、やっと正気に戻った僕は、
「へっ？」

　僕はオレンジジュースを買って、男の前に座って飲んだ。男をチラリと見ても、見れば見るほどうさんくさい。こんな凶悪そうな、正義の使者の警察官がいるのだろうか。どう見ても、あやしい。
「おい、なにじろじろ見ているんだよ。勘弁してくれよ。まだ、疑っているのか？しょうがないな。ほら、これでも見て見ろよ」
　男は懐から黒い手帳を取り出して、僕の前に突き出した。黒い手帳は、警察手帳と書いてある。
　僕がはじめ思ったのは、もしかして偽造かもしれないということだ。だが少し考えて、あまりにも疑り深い自分が嫌になったことと、仮に警察官になりすますならもっと根本的な風貌から変えるだろうと思い至り、男の話を信じる気になったのだ。
　そのとたん緊張の糸が切れて、ふぅと息をついた。それを見ていた男は、満足そうに頷いた。
「おまえは、親父の隣に入院していたやつだよな？」
「あっ、はい。でもどうして知っているんですか」
「馬鹿野郎、一回来ただろう。警察の人間は一瞬でも見た奴の顔は忘れないんだよ、っていうのは冗談だけどなぁ、お前が寝ているときにも来たことがあってな」
　男がコーヒーの缶を垂直に傾けて、最後の一滴まで飲み干した。
「でもな、お前も、あんな老人と一緒で疲れただろう？」
「いいえ、そんなことないです。僕は・・・」
「何だ？」
「おじいさんが、好きですから」
「ハハハ、本気かお前？・・・でも、ありがとよ」
「さっきのおじいさんは」
「お前、本当に知らなかったのかよ？親父はボケで入院していたのに、それにも気づかなかったのかよ？」
「・・・」
「ここ一ヶ月は本当に良くなったと錯覚するくらいまともだって先生も言っていたんだぜ。俺の前ではいつも通り変わらなかったけどな。親父には世話ばかりかけていたから仕方ないなと思っていても、やっぱりつらかったな」
　男はいつしか遠い目をして、語り出していた。
「親父は、俺が小さい頃はとても恐くてな、いってみれば厳格だったよ。それは、早くに俺の母だから、親父の妻だが、を亡くしたこともあってかもしれないがな。だから、親父は俺を男手一本で育てなくてはならなかったんだ。いわゆる、責任感ってやつか、親父は人一倍強かった」
　男は点を見上げるように視線を上目遣いに移して、続けた。
「俺が成人した頃には、親父は六十歳を越えていた。俺は遅く生まれた一人っ子だったんだ。そんな俺の成人式の日、親父は母の仏壇の前で泣いていたよ。俺は、そのころ不良をしていて、ホントに悪行の数々を犯していた。まあ、あのまま行くと、マジでヤクザにでもなっていたかもな。それほど、悪かった」
　恐ろしいくらい容易に想像できた。
「親父は俺が成人したその晩に俺に言った。『これからはお前の人生だ。伸び伸びとやりたいことをやれ。正しい、正しくない、そんな世間の基準に卑屈になることはないからな。でもな胸張

って生きろ。自分で納得して生きろ。それだけだ』って。俺はズシッと胸にこたえたよ。俺だって自分の生き方がよくないってことは薄々思ってはいたが、世間の基準ってやつも嫌いで。なんか突っ張っていたんだと思う。けどな、胸を張って納得して生きられているかといえば、明らかに違ったんだよ。考えに考えた結果、こうだよ。不良から、警察になっていた。おかしなもんだろ」
　男の目が涙ぐんでいた、鬼の目にも涙。僕もしんみりした気分になっていた。
「親父がおかしくなったのは、そのすぐ後からだった。夜を徘徊し、妄想がどんどん加速していった」
　男は涙が溢れて、あわてて服の袖で涙を拭った。
「ゴメンな。俺に涙なんて似合わないよな」
　僕はそんなことないと首を横に振った。
「お前は本当にやさしいな。親父がまともでいられたのが、わかるような気がするよ。つまらない話につき合わせてしまって悪かったな」
「そんなことないです。でも、これからおじいさんは・・・」
　男は暗い顔をした。
「かわいそうだが、もう家には帰れない。老人ホームに移るんだ」
「老人ホーム・・・」
　僕はおじいさんが、泣いていた理由がわかった気がした。自分では正気だと思っていても、時として自分じゃない行動をとってしまって、このまま行くとこうなるとわかっていたのだ。
「言い忘れたがな、俺は北尾誠二。また、縁があったら合おうや」
「僕は、篠崎カオルです」
「カオル？女みたいだな」
「よく言われます」
「じゃあな」
　僕も去っていく後ろ姿を見送った。強面の男、北尾の後ろ姿は、前のように冷たさは感じなかった。
　それどころかあたたかく、温もりがあるように映ったから不思議だった。

「デブ山じゃなくて、中山君。この間は本当に悪かったよ。ゴメン」
　僕はデブ山に両手を合わして謝っていた。
「お前なぁ、喧嘩売っているのか？まあ、いいや、許してやるよ」
　デブ山の毒のある言い方はいつものことだから、僕はホッとした。
「ものは相談だけど中山君、今日学校が終わってから少しつきあってくれない？」
「おい、お前なぁ、会話が不自然なんだよ。もういいから、普段通り話せよ」
「じゃあ、デブ山、今日一緒に帰ろうよ」
「このやろう、急に代わりやがって。まあ、いいぜ。今日は塾ないし」
「よし、決まりだ」
　という会話のあと、僕はデブ山といっしょに病院に行ったのだ。
　一直進におじいさんの部屋に行って、最後のお別れがしたかったからだ。
　おじいさんの病室の前で、デブ山に事情を話し、
「そういうわけだから、僕が学校で楽しくやっているということを、おじいさんに最後に見て貰いたいんだ。こんなことを頼めるのはおまえしかいないんだ」
　と、手をついて頼んだ。
「ああ。おまえ、案外に人のこと考えているんだな。ちょっと、見直したよ。こんことなら、喜んでつき合ってやるよ」
　デブ山が顔の肉を大移動して軽く笑った。僕は何も人のことを考えてない薄情な人間だと思われていたことに少し心外だったけれど軽く流した。
「僕にも確かにわからないんだ。とにかく最近なんだ、他人のことであれこれ考えることがあるというか、うまくいえないけど。じゃとりあえず行こうか」
　僕たちはおじいさんのいる病室に入った。中にはちょうどデブ看護士長がいた。
　すぐさま僕の顔を見て、あら、久しぶりねと懐かしそうに見つめた。僕はあまり目を合わさないようにしつつ必要最低限の愛想笑いをして、おじいさんのところに近寄った。
「じゃ、夕方に息子さんが来られますから、またその時に」
　デブ看護士長が出て行くとき、また僕の方をチラリと見て、
「じゃあね。カオルくん。それと、お友達の健康そうな方。またね」
　彼女が出ていってすぐ、デブ山が、
「なんか、感じのいい人だな。俺のこと誉めてくれたよ。ハハハ」
　まったく鈍い。デブってことだよ、と思ったがいつものようには口には出さなかった。
　それより、おじいさんだ。
「おじいさん」
　おじいさんは昨日と同じような状態だった。僕が何度呼びかけても、全く気づいてくれなくて、ただボーっとテレビの方を見ている。見ているといってもただ画像を眺めているだけというか、内容なんてもうわからないだろう。
「おじいさん、僕、カオルだよ。元気しているから。ねぇ」
　いくら言っても、無駄だった。
　そのうち、僕は心がつぶれそうに痛んだ。心臓の鼓動が大きく高鳴って、めまいがしてきた。そういった僕の気持ちを察してか、デブ山は気まずいだろうが嫌な顔一つしなかった。
「帰ろう、デブ山」

　しばらくの無言の後、僕は耐えられなくなって、デブ山に言った。
「もういいのかよ。俺のことなら気にしなくていいんだぜ」
「いいんだ、もう」
　僕がおじいさんに頭を下げて、帰ろうとすると・・・
「おじいさん」
　僕の学生服の裾を、おじいさんが震える手でつかんで、僕の方を悲しげに見ていた。何も言葉はなかったけれど、それだけで十分だった。僕は我慢していたものが一気にこらえられなくなって、声を上げておじいさんにすがりついた。もちろん涙は出ないのだが、つぶれそうな声が病室にこだました。
　僕は悲しみを乗り越えられる強い人間になりたい。
　だって、悲しみが多すぎるから・・・

死ぬとき

「なあ、デブ山、ちょっと休もうよ」
　僕らは病院からの帰る途中の、小さな公園でちょっと休んだ。僕はひどく疲れを覚えて、頭にズキリと痛みを感じた。すっかり夕闇に包まれていて、寒かった。
　どれくらい休んだだろうか、デブ山は文句一つ言わずにじっと待っていてくれた。
　やっと、僕の頭痛もおさまって、軽く頭を振ったがなんともなかった。
「なあ、カオル・・・」
　その時デブ山が口を開いた。
「何？」
「おまえ、大変だな」
「何が？」
「いろいろだ。体のこととか」
「いや別に」
「ゴメンな。悪気はないんだ。ただ、いろいろ大変だって思ってよ」
「別にもういいんだ。なんだか、吹っ切れたよ」
「おまえは強いんだな」
「違うよ」
「違うって？」
「あきらめているんだ。もう、生きていてもどうにもならないし、ただつらいだけだから」
「でも、つらいのはおまえだけじゃないよ」
　以前の僕なら、おまえに何がわかる？と自嘲的に笑ってそれ以上話そうとも思わなかったのかもしれない。でも、今は違った。
「そうかもしれない。でも、誰にも夢見る未来があるだろ。僕にはない」
「悲しくなるようなこと言うなよ。生きている間だけでも、まだ長いじゃないか」
「長いって？僕は・・・」
「ごめんな。そんなつもりじゃないんだ。少しでもおまえを励ましたくて」
「ああ、わかっている。でも僕は、あと五年も生きられないんだ」
「・・・・・」
「おまえも医者をめざすなら知っておけよ。僕の病気は九九％が二十歳までは生きられないんだ。僕がここまで生きているのも、運がいいぐらいなんだ。
　死ぬときは体がしびれてきて、口から血が吹き出すんだ。それで、脳が死んで、僕も死ぬんだ。体がしびれ始めたら、僕は死ぬ。
　おまえはきっとよい医者になるだろうし、その前向きな性格でいろいろな人を助けるに違いない。けど知っておけよ。僕のように助けることのできない命もあるってことを」
　デブ山はしばらく黙り込んでいたけれど意を決したように口をひらいた。
「おまえの病気でも長生きした人はいるだろう。俺はこう見えても調べたんだ。ほんのわずかだけど、長生きしている人がいるってことを。きっと信じれば奇跡は起こるよ」
「無理だね。やめてくれよ。希望とか奇跡とか。僕の人生というものは監獄で生きることでしかない。それに」
「それに？」
「僕は死にたいと望んでいるんだ。奇跡なんて起こらないよ」

　デブ山もさすがに戦意を喪失したように言葉を失った。
「・・・じゃあ、なぜだよ。こんなことやっている時間なんてないだろう。やりたいことやったらいいじゃないか。学校なんか来るなよ」
「確かにそうかもしれない。でもこれは僕じゃないとわからないんだ。うまく言えないけど、どうせ死ぬと思うと、何をやってもむなしいんだ。素直に楽しめることなんてまるでない。
ただ・・」
「ただ？」
「死ぬのを待っているだけだから」
「馬鹿野郎！お母さんはどうするんだよ」
　デブ山が大きな声を出した。僕はもうどうでもよくなって、ゆっくりと口を開けた。
「母は僕を生まなかったらよかったんだ。彼女の幸せのためにも」
「・・・」
　デブ山もそれっきり閉口した。僕は悪いことしたと思ったから謝ったけれど、デブ山は無言で帰ってしまった。
　狭い公園で僕はポツリと一人になった。時折吹く風にちょっと震えがしてきた。
　どちらにしてもわかったことは、僕は最低の人間だということだった。

　何も答えは出ないまま、僕は何日か学校に通った。
　あれからは、デブ山とも口をきいてないし、特に誰とも口をきいていない。
　ただ、担任のハゲトールには進路のことについていつも聞かれ、依然とわからないと言った。母に相談したわけではないし、自分で何かを決めたわけではない。ぼんやりと日々を過ごしていただけなのだから。
　教卓では中年の脂ののった国語の教師が、文法がどうだこうだと熱演している最中だ。僕は彼の言葉が右から左へと流れてゆく。
　それを尻目に僕は窓からコンビニの方を見つめていた。誰も往来のない田舎のコンビニはひっそりしていた。
　音のない風景は僕の悲しい心のようだった。僕が住んでいるこの世界は、いつも何もなかったように同じだ。
「おい、篠原、聞こえないのか」
　国語の教師は小柄なであるが、声はどっしりと重い、が僕のところにずかずかとやってきた。
「ちゃんと聞いているのか？」
　と嫌味を言い、やる気のない奴は、と言いかけて、わざとらしく口を閉ざして、教卓に戻る。
　致命的な特別扱い。
　なんだ、あの目は。まるで弱いものでも見るような。あわれむような、見下すような冷酷な目は。
　僕は本気で嫌になっていた。
　もう嫌だ。こんな授業は耐えられない、窒息しそうだ、死にそうだ。
　僕はおもむろに立ち上がって、教室を出た。教師も追ってこないし完全に無視だ。教室を出て静かに下駄箱に向かった。
　心は悲鳴を上げて泣いていた。何か間違っている、おかしい、どうして僕ばかりこんなにつらいのだろう。
　もう学校には行かない、行くものか、あんな地獄、いいことなど何もない。
　僕の入り込む隙間はここにはないのだ。僕には居場所も、やすらぎも、楽しみも、ないのだから。生きていて何になるというのか、つらいだけなのに。
　もう耐えられない。僕は何度も繰り返した。
　帰る途中、何度も車に飛び込もうと思った。楽な死に方はないのか、そんなことばかり考えていた。

　僕はさだまった方向もないままフラフラと、いつの間にか商店街に出ていた。活気のないさびれた商店街である。若者の姿はまるでない。人もまばらで、ひっそりとしている。
　本当に僕はボーとしていたのだろう。いつのまにか商店街の脇の小さな路地を抜けて、風俗店の蔓延している歓楽街に出てしまっていた。
　ここは、治安も悪く、要するにヤクザものの生業である、地元の一般の人は立ち入ることすらしない、とても危険に満ちた場所なのである。喧嘩、売春、拳銃の発砲事件や、などはほとんどここで起きるという事実からも裏打ちされている。
　早くここを抜けないと、そればかり考えて引き返そうとしたとき、ハッと目のすみに見覚えのある顔が映った。あれは北尾誠二、おじいさんの息子のヤクザ顔の警察官である。これがまた恐ろしいくらいこの場が似合っている。
　何をしているのだろう？。北尾の見ている方向には・・・男と女のカップルがいる。僕もすぐ状況がつかめた。あれは、おそらく売春ではないのだろうか。
　目を凝らしてみると、それはカップルといったようなものではなく、男の方が半ば無理矢理女を引っ張っているという感じである。あわれなものだ。
　うっ、思わず声が出そうになった。あの女は・・・野上佐知子、あのおしゃべりでうるさい、この前職員室の前で泣いていた、である。化粧をしているから大人びて見えたが間違いなく彼女だった。
　僕の頭の中は混乱していた。彼女たちを警察は見張っている。あきらかに、何か悪いことである。彼女が警察に保護されるようなことにでもなったら・・・。
　退学は中学校にはないにしろ、どちらにしても彼女の将来はめちゃくちゃである。黙って去ろうとしたけれど、やっぱりほっておけない！

　僕はすぐさま走った、彼女に向かって。
　北尾には多分背中しか見えないから、僕だとは気づかれないだろう。迷ったがこれしかないと思い、彼女に勢いよくぶつかった。
「キャッ」と彼女は短く叫び、前のめりにたおれた。
「おら、この野郎！」
　ヤクザものの手が僕の襟首をつかんだ。このまま殴られでもしたら、警察はすぐに飛び出してくるだろう。
「警察が・・・」
　僕は小声で言うと、男は明らかにギョッと目をむいて、あわてて僕を放して、警察を確認したのか、慌てて逃げ出した。僕もすぐ立ち上がって、野上の手をつかんで走った。警察は追ってこなかった。捕まえるだけの理由がなかったのだろう。

似ているね

　僕は川を見ていた。野上は横にしゃがんでいる。ここまで来れば大丈夫だろうと、たどり着いたのがこの河原である。水面には太陽の光が反射して、きれいにキラキラ光っている。川のせせらぎ以外は完全な沈黙状態だった。
　ときおり部活動をしていると思われる学生が河川を走っている以外あまり人はいなかった。平日の四時頃なので、何をするにも中途半端な時刻なのだろう。直径にして十メートルくらいの大きな川だけれど、そこは浅く下の砂が透けて見える。
　僕は隣でうつむいている野上に対して、しばらくそっとしておいた。彼女がいつ僕を見捨てて立ち去ってもおかしくなかったし、そうなっても僕は追うこともなかっただろう。
　ややあって、彼女は立ち去らず、
「どうして・・・どうしてあなたは聞かないの」
　と、おもむろに口火をきった。
「何を？」
「何をって、私が何であんなところで、あんなことを・・・」
　野上の声は小さくなっていき、ボソボソと聞き取りにくい位になっていた。
「別に、どうでもいいことだから」
「どうでもいい？あんた冷たいのね。私のことは何も興味ないってことよね。この前職員室の前でもそうだったし、ほんとうにあなたの好きなタイプでなくて悪かったわね。露骨に無視されるとは思わなかったわ」
　彼女は妙な勘違いをしているようだった。
「あ、ごめんよ。もちろん気にはなるけれど、逆にじゃあ聞くけど、そんなこと聞いて欲しい？
　僕は誰かから追いつめられていることが多いから、あまり他人を追いつめたくないんだ」
　彼女は首を振った。
「そんなものだよ。他人のことなんて何もわからないんだから」
「あら、あんたやけに悟ったようなこと言うのね」
　野上ははじめてやさしい口調で言った。
「別に。偉ぶっているつもりはないんだけど、本音を言うと、こういう時どう接したらいいのかわからなくて」
「あっ照れている、ハハハ。でも、わかったわ。あなたの気持ちが、よかった」
　彼女は僕を指さして笑った。あのいつものような元気な笑いだ。僕もなんだか安心とも愉快ともつかない気持ちになった。
「とにかくありがとう。篠原君、ねぇ、これから暇？」
　まず彼女が僕の名前を覚えていたのに驚いた。
「何で？」
「も一質問を質問で返さないで」
「あ、ごめん。もちろん暇だよ」
「じゃ、決まり。家においで。お礼させて」
「でも・・・」
「だから、決まったって言ったでしょ。あなたはうちにくるの。さっ、歩いて歩いて」
　彼女は僕を軽く押した。完全に彼女のペースにはまってしまったのだ。
　でも、悪い気はしなかった。

　あばら屋。
　そんなものは今の世の中そう滅多にはないだろう。今にも崩れそうな木の集合体、この方がより的確に形容しているだろうと思わせるほどに、野上の家はひどいものだった。
「なに見ているの。さっ、入って、入って」
　家の中は思った通り薄暗かった。窓からはほとんど光は入らないので昼間でも暗いのだが、暗いからと行って電灯の明かりがついているわけでもない。ふと電灯の方を見て僕は唖然とした。天井からつり下げられている電灯には白熱灯がついていなかった。
　ミシリ、歩くとすかさず床板が悲鳴をあげる。入ってすぐの部屋を通り抜けて、彼女の部屋らしいところに通された。
　それにしても狭い家だった。さっきの部屋と、この部屋とあとは台所くらいしかない。
　彼女は部屋を出ていったきりしばらく僕は取り残された。ぐるりと見回して、まず机の上の写真に目がついた。彼女が両親と映っている。何処にもある、団らんの写真だ。どこかの山のようで、到着点の表示や、きれい秋色の紅葉が辺り一面にある。彼女もやたら若い、というか小さい子どもである。
　あっ、僕は彼女の右隣で笑っているのがさっきの男だとわかって驚いた。まさか、父親だったなんて・・・。
　彼女がコーヒーを持って入ってきた。僕は慌てて写真から目をそらしらが、その動作が白々しかったのか、
「見たのね。そうよ、さっきのが、父なの」
　別にとがめるようでなく、まるで生きるために空気を吸うのは当然よと言わんばかりに平然と言ってのけ、僕の前にカップを運んだ。そして続けた。
「ひどいでしょ。娘に売春を強制するんだから」
　僕は彼女を見た。幾分影のある顔をしていた。でもすぐニッコリ笑って、
「あなたこそ、なんであんなところに？あっ別に嫌ならいいけど、他人は他人だからねぇ」
　彼女が意地悪く言う。
「いや、言うよ。別に大したことはないんだ。学校にいたら・・・死にそうになった」
「それって、病気で？それとも精神的に？」
　彼女は僕の病気のことも知っていたのだ。僕は少し考えたが、
「後者かな。僕には居場所がないことがよくわかったんだ」
「そう」
　彼女もそれ以上聞いてこなかった。しばらく沈黙がながれた。やがて彼女がうつむき加減につぶやいた。
「似ているね、私たち」

「緊張する？」
「う、うん」
　僕は佐知子に町中でいきなり手をつながれ凍り付いていた。翌日、僕たちは学校を休んでデートをしていた。僕にとっては初めてのデートで、コチコチに緊張していることを彼女はうれしそうに眺めている。
「何が面白いんだよ。僕はこの通り困っているよ」
「困っている姿が面白いのよ」
　佐知子は意地悪そうな目で僕のほうに顔を向けた。
　この前程ではなく化粧は控えめだが、やっぱり化粧映えする。驚くほど大人びて見えるのだ。
「ねえ、どうしてそんなに緊張するの？」
　僕たちは向かい合って喫茶店の席に座っていた。時間は昼に近かったので、このままお昼ご飯でも食べようという話になったのだ。彼女は口数の少ない僕を見かねてにこやかに問いかける。
「つまり、僕は慣れてないんだよ。こんな風に女性と話すことが」
「あ、私でも女性って認めてくれるんだ。ふむふむ」
　佐知子は子供のような目で僕を見る。大人びた外見とギャップがまた僕の心臓を刺激するのだ。
「なんかいろいろ考えてしまうんだよ。僕は」
「え、なにを？」
「いや、君をすごく退屈させているんじゃないかって。だから何か話そうと思うんだけど、あまり面白い話が浮かばなくて、思考が固まってしまうんだよ」
「あ、そんなことで。今の会話だけでも十分面白いのに」
「え、どこが？」
「そんなこと思っても、普通の人は言葉にして言わないものよ。心の中を聞いているようで楽しいわよ」
　僕は完全にからかわれているようだったけど、やっぱり悪い気は一つもしなかった。
　やがて運ばれてきた昼食のカレーとスパゲティーを僕たちは平らげ、佐知子は水を飲み干してから、
「このカレーはカレー（辛い）」
　などと、いつの時代かもわからないような古典的なギャグでおどけている姿を見ると思わず口元がゆるむ。緊張の糸もほぐれてくるのがわかった。
「少しうち解けられたところで、私から質問」
「ああ、なんでもいいよ」
　しばらくあれこれと話した。家族の話や病院の話から、好きなテレビとか趣味とかもろもろのことである。僕も自分の好きなこととなると饒舌に語るところがあるようだ。けれども次の質問で凍り付いてしまうのがわかった。
「ねえ、カオル君は何か夢はあるの？」
　僕が突然不自然に黙り込んでしまったのを見て、佐知子は気づいてか、
「言い方をかえると、行ってみたいところとか、あるでしょ。それが聞きたかっただけなのよ」
「あ、それならある」
「え、どこどこ」

「当ててみなよ。絶対わからないから」
「ヒントは？　ねえ、日本なの外国なの」
　本気で当てに行っているような彼女をからかうのも悪いなと思って、僕ははずかしい気持ちをこらえて口に出してしまった。
「宇宙に行ってみたいんだ。火星とかね」
　僕は口に出してしまってからあわてて恥ずかしくなってしまった。彼女はというと、妙にウンウンとうなずきながら、
「いい夢持っているじゃない。いつか叶うといいね」
　と、ニコリと笑った。僕はいつものように「無理だよ」と余計な反論をする気持ちすらなく、ほほえましい気持ちになっていた。
　こういう風に僕は彼女といると妙な安らぎを覚えた。なんでも心の中をさらけ出せるような懐の深さを感じるのだ。

　僕はそれから学校には通わなかった。授業を欠席しても、母も学校側もとくに咎められなかった。そのことが、今回ばかりはありがたかった。
　日中には野上佐知子に会った。町をぶらぶらしたり、河原で寝ころんだり、公園のベンチに座ったり。世間の人から見ると、とてもみすぼらしいデートかもしれないけれど、僕は満たされた気持ちになっていた。
　会うたびに僕たちはいろいろなことを打ち明けあった。このようにして、お互いの心情を告白したとき、彼女が言った通り僕らはとても似ていることがわかった。加えて、彼女はとても弱く、純粋な心を持っていることもわかった。
　素顔の彼女はあらゆる面で美しかった。何かしら心に陰を持っている女性は、神秘的な光を持った宝石のように僕を惑わした。
　そうやって、四月は終わり、僕はいつしか永遠にこんなふうに生きていきたいと思っていた。
「ねぇ、一緒に死なない」
　ある時、とても自然に彼女が言った。夕方の公園は僕と彼女の他は誰もいなかった。ちょっと、肌寒い風に、木がざわめいているだけだった。
「いいよ」
　事実、彼女となら悪くないと思ったのも事実だったし、単なる冗談だととらえていたのもどちらも事実だ。
　しばらく不自然な沈黙が流れた。
「じゃあ、死ぬ前にこれを見てよ。じゃじゃんと」
「え、それは。」
　彼女はおどけた顔をしてチラシのような小さな紙切れを得意げに広げている彼女を見た。雑誌の切れ端のような紙だったけれど、僕は内容に驚きそして興奮した。
『火星が地球に大接近。当天文台では夜間観測会を行います！参加費は二百円、日時は・・・』

「今日の夜？」
「そうよ。いい思い出になると思って。行きたくないの？」
「意地悪を言うなよ。是非行ってみたいよ。けど大丈夫なの、深夜だけれど」
「私は平気よ。もともとあまり期待もされてないし。カオル君こそお母さん心配するのでは」
　僕は「かまうものか！」とうなずいた。もはや彼女と過ごすこと以上に大切なものは何もなか

ったし、ましてや火星が見られる機会などもう一生ないのだから、是非とも見に行きたかった。心から思った。
　このころの僕はすごく前向きだったように思う。彼女の本心を知るよしもなく、ただ楽天的に、自分のことだけを見て生きていたのではなかろうか・・・。

天文台に登る

　僕たちは隣町の山に来ていた。バスを乗り継ぐこと三時間、ようやく山の麓についたのは午後五時を回っていた。観測会は八時から開始と書いてあったのでなんとか間に合う換算だ。
「私たちかなり運動不足ね」
「ああ」
　僕たちは三十分も歩かないうちに肩で息をしていた。高い山でもないのに果てしなく続くような気さえする。あたりはうっすらと暗くなってきていて、ギーギーと不気味な鳴き声の鳥が鳴いていて、不気味な印象に染まっていた。
「もう道路が見えないね」
　あたりに民家や外灯がない山奥はほんとうに暗い。普段の生活では体験できないくらいの闇があたりを塗りつぶしている。
　およそ二時間、二人の間には会話がなくなったときにやっと、山のほぼ頂上にそびえる天文台が見えた。
　入り口に近づくとスペースシャトルの模型が大きく飾られており、入り口の鉄条網が空いていた。それどころか中にはたくさんの車が止まっており、たくさんの人の気配がした
「どうしたのかしら？」
「はやいね・・・」
　想像を超えてすでに何十人の人たちが来ていたのだ。物好きはいるものだと僕は少し感心しつつ、期待の高鳴りを胸に感じていた。
　二人は門を入り、車の横をすり抜けて観測所らしい建物に近づいた。やっぱり案の定たくさんの子供を連れた家族が入り口からあふれていた。
「すごい熱気ね」
「うん、なにせ火星が見えるからね。誰も興奮しているんだ」
　待つことおよそ一時間、やっと僕たちの望遠鏡を覗くことができる番になった。階段を上り、二階にある真っ暗な望遠鏡室に入る。全長五メートルはあろうかという大きな望遠鏡が部屋の真ん中に置かれていいた。
「すごい大きいね」
　彼女は一人感動していたけれど、僕は一目散に望遠鏡をのぞき込んでいた。しばらくの時間我を忘れて集中してしまっていた。
「ねえ、どうよ」
「あまり大きくは見えないけど、火星なんだって思うと見とれちゃって」
「どれどれ」
　感覚的に直径一センチくらいのぼやけた黄色い丸でしかなく、これが火星と聞くとびっくりもする。これだけ大きな望遠鏡を使ってもこの大きさなのだから、いかに遠くなのかと驚く。
「ほんとうだ。もっと大きいのかと思ったわ。カオル君、顔笑いすぎだよ」
「え、そうかな。ごめん、ついつい無我夢中で」
「まったく、面白いんだから」
　彼女は軽く笑顔を作ると、僕たちは次の人に順番を譲って望遠鏡から離れた。ほんとうに躍動するといおうか、心底、僕は満たされていた。

　まるで興奮を冷ますためかのように、僕たちは山の中をゆっくりと歩いていた。時折見かける

天文台帰りの車以外は、闇夜に包まれていた。道のカーブすらも見落としてしまいそうな暗い道を僕たちは肩を寄せ合って山道を下っていた。
　漆黒の中で見上げる星空はまばゆくて、上空ではまるで星たちが自由に動き回っているかのような錯覚すら感じるような、実に無限を感じる夜空だった。
　まるで、僕の気持ちを表しているかのようだった。こうして好意を感じる女性と、興味のつきない宇宙を見た後だから当然といえば当然なのだが、頭で考えている以上に気持ちが高揚していた。
「ねえ、カオル君」
「何？」
　突然、彼女が口を開いた。とぼとぼと歩調は変わらないけれど、幾分か足音が重くなるような気がした。
「私ね、今日の夜のこと、いい思い出になったと思っていて」
「僕も、君にお礼が言いたいと思っていたんだ。何か夢がかなったようなすばらしい気持ちになれた」
「あなたから夢という言葉が聞けるなんてね」
　彼女が僕の方を見ているのはわかったけれど、表情までは見受けられない。
「宇宙って、カオル君に会うまで全く興味がなかったけれど、こうして見てみてすごく何か新しいものを見たような気がして、とても楽しかったかも」
　彼女はなおも続ける。
「今度ね、生まれてくるときはきっと宇宙に行けるといいなって思ったもの」
「そうだね。けど僕はずっと考えていることがあって」
「どんなことを？」
「僕たちは死んだらどうなるかってね。いつも身近に死を意識していると嫌でも考えてしまう」
「それ私も興味ある。でも宇宙と何か関係があって？」
「死んだ後は、僕も肉体のハンディキャップから解き放たれて、どこへでも自由に行けるのではないかって。きっと宇宙にだって行けるのかなって。もちろん僕が小さかった頃の空想だけど。なんか思い出してしまって」
「そうね。この世で満足に生きられなかった分、何かみつかるといいわね。お互いに」
　僕は少しだけ違和感を覚えていた。
「佐知子も、死後のことを考えるの？」
「ええ。けど、私は死んだらきっと地獄に行くだろうって思う。けどそれもいいかなって思うの」
「生きるのがつらい？」
「あなた程ではないわ。たとえば」
「何？」
「ここに来る前に言ったように、私が一緒に死んでくれるって言ったどうする？」
　彼女の顔は相変わらず見えないけれど、空気から深刻な話になっているのが嫌でもわかる。僕は迷う余地もなく、
「もちろん一緒に死ぬよ」
　と答えた。
　やや間ができた。じわりと背中に嫌な汗がこみ上げてくる。ときおりざわめく虫の声が、逆に耳につくような違和感。逃げ出したくなるように重苦しい空気感。

「ありがと」
　不意に彼女が僕に近寄ったかと思うと、僕のあごに手をかけて、一瞬のうちに僕と彼女の唇が重なった。僕の頭は混乱して心臓が生き物のように暴れるのがわかった。じっとりとする汗が一気に冷たくなる背筋。唇がまるで全身のすべての感覚が集中したかのような倒錯感。
　一秒くらいであったのだろうけど、長く感じた。
「はじめて？」
「も、もちろんだよ」
　彼女が僕をからかってその場は軽い空気に支配されたけれど、僕は気が気ではなかった。もちろん僕はうれしかったし、心に強く願っていた。
　いつまでも彼女と一緒にいたい。
　僕のすべての存在理由は、彼女そのものだった。

突然の終わり

　天文台から帰った次の日の朝、僕は普通に目が覚めた。翌日は深夜に帰ったため朝寝坊してしまっていた。母は僕が帰ってくるまで寝ないで待っていたが、普通に仕事に出かけ留守だった。
　いつものように佐知子と会おうと思い支度をしていた。昨日までと何も変わりのない「今日」が始まるはずだった。
　僕が家を出る前に彼女の家に電話したけれど誰も出なかった。彼女の父はほとんど家には帰らないので留守だとしても、彼女がいないというのは珍しいなと思った。
　本当にこれくらいの感情しかなかった。

　僕の家から佐知子の家までは歩いて二十分程度かかる。繁華街から離れた裏通りを通ることが多い。佐知子の家の近くの公園は必要十分という感じに小さいものだったけれど、僕たちがよく待ち合わせに使っていた。彼女も学校に出ると家を出て、この公園で僕を待っていることが多かった。だから僕は電話に出ない彼女はきっとここにいると思っていた。
　一見して小さな公園に人影は見あたらなかった。
　僕がそのまま彼女の家の側まで来たときに、唐突に一台の救急車がけたたましいサイレンを鳴らして僕の横を通り過ぎた。この先に家は数えるほどしかない小道だっただけに、初めて不吉な予感がした。
「あの子がね・・・」
　途中ですれ違うおばさん達がうわさ話をしているのが耳に入ってくる。
　僕の目の前の光景がすべてスローモーションに見えていた。
「まさかね・・・」
　まさかって？
　ドクンと心臓の音が響きわたり、周りの雑音が消えた。
「助かるのかしら」
　核心に近い言葉を発したときに、まさに彼女の家から救急車が出てくるところだった。
　夢のような信じられない光景を僕は見つめていた。
　そして。
　走り去る救急車を、僕は病院に向けて走っていた。
　息切れがして頭が痛んだけれど必死に走った。
　病院はとても遠くて、僕はけっきょく間に合わなかった。
　僕がやっと病院に着いたときには彼女の顔には白い布が被せられていた。
　野上佐知子は自殺したのだ。遺書もなくひっそりと首を吊って・・・

　僕は言葉もなく唖然として立ちつくした。今までたくさんの不条理の海を泳いで生きてきたつもりだったのに、彼女の自殺だけはあまりにレベルが違う勢いで僕を飲み込んでいった。僕のすべての感情は壊れてしまい、頭が空白になった。
　僕の進む道は決まったと思った。
「私が一緒に死んでくれるって言ったどうする？」
　昨日の彼女の言葉が、彼女の声で頭の中でぐるぐると回る。
　僕は、死にたいと願っていた。

　僕はその夜、家を後にした。もう帰ることはないだろうと思った。暗い夜道を歩きながら、彼女のことを思い嗚咽がしていた。未だに涙は出せなかったけれど、僕は人生の中でもっとも悲劇的な心境に陥っていた。心はつぶれそうに縮小していくのがわかった。
　彼女は何を思って死んだのだろう。信じられなかった。
　少なくとも僕は・・・、彼女がいるからこの世界も好きになれるような気がしていた。しかし彼女は違ったのだ。彼女を僕は救えなかった。守れなかった。
　彼女は優しかった。本当に悲しみを知った人間しか知り得ない、奥の深いものだった。
　彼女はなぜ自殺したのだろう。
　意味のない問いを僕は繰り返していた。
　売春させられたから？　高校には行けないから？　父親がヤクザだったから？　母がいなかったから？
　・・・わからない。けっきょく何一つ分かり合えていなかった気がしきて、ますます沈んだ。
　どちらにせよ彼女は戻ってこない。
　彼女の家の前まで来た。ひっそりとしている。中には誰もいないようである。こんな時まで、どこへ出かけているあのヤクザを殺してやりたいと思った。でもちょっと考えると、あの男を殺したところで、やっぱり彼女は帰ってこない。
　どちらにしても、彼女はもうこの世にはいないのだ。僕の生きている意味もまるでないのだ。この世に僕をつなぎ止めてくれていた一本の糸、それは彼女だった。
　糸が切れた僕にはもう生きていることはできないのである。

　人はなぜ死を選ぶのだろうか。僕にとって死は何も特別なことではなく、すぐ隣にある現実だった。小さい頃から死の陰におびえながら生きていた。ひねくれて、世の中を斜めに見て、自嘲して、僕は自分の弱さを隠していたのだと気づかされる。
　どうせ死ぬのだから。僕は口癖のように、母に、病院の先生に、そしてデブ山に、言ってきた。そのくせに、けっきょくは死ぬ勇気もないように毎日を無駄に消費してきたのだ。
　悲しみの意味って何だろう。彼女とよく会った小さな公園のベンチに座りながら考えた。僕にとってはそれしかなかった。生きていても悲しいことだけだった。
　僕は生まれてこなかったらどんなによかっただろうか。本当に、心から思う。
　母を不幸にして、家庭を引き裂いた。母の顔は疲れ切っている。僕のせいだ。再婚だってしない。僕がいるからだ。病気のため僕にはお金もかかるのに、自分の身を削って努力してお金を稼いでいる母。僕はそんな母を、無駄な努力だとさめた目ですら見ていたのだ。
　このように考え至るとしみじみと確信してしまう。
　ほんとうに僕は存在すべき人間ではないのだ、ということを。
　そこまで思うとまた嗚咽がした。
　母にはすまないことをしたと思いがした。
　僕は誰一人、そう彼女一人救えないのに、誰にも迷惑しかけられないのに・・・、生きている意味なんてあるはずもない。
「存在してごめんよ。そしてさようなら」
　僕は最後の決心をして立ち上がった時、目の前の水銀灯のひっそりとした明かりの中に人の形が浮き上がった。

母がいた。

僕はひどい顔をしていたことだろう。母は無言で近寄ってきた。母の顔も厳しく曇っていた。僕もじっとその場にたたずんだ。薄暗い公園で僕は幻影と向かいっているような気分がしていた。何かといえば、僕の心の中の幻のような。
僕のすぐ目の前に母がやってきたとき、その顔にはたくさんの涙のあとが幾重にも重なっていた。
「カオル、帰ろう」
驚くほど弱い声で僕を呼んで、抱きついた。僕はどうしていいのかわからなかったけれど、冷静に見つめていた。
しばらくじっとしていた。母はまるで子どものようにすすり泣いていた。僕はまた母に心配をかけたのだと思って、やりきれなくなった。
僕はおもむろに母を振りほどいた。
「どこに行くの！」
母が悲鳴に似た、ヒステリックに叫んだ。
「・・・」
僕は母を後ろに感じながら、立ち止まった。
「ねぇ、お母さんと帰ろう。家に帰ろう」
「・・・」
「また一緒に暮らそう」
僕はちょっと考えて、言葉を選びながら口を開いた。
「もう帰らない。もう迷惑はかけたくないんだ。わかってくれよ、母さん」
振り向いてしっかり母を見て、強い口調で言い切った。
「僕なんて、いないほうがましなんだよ」
その時、母がカッと目をむき出して、僕の頬をぴしゃりと叩いた。じんとした痛みがした。
驚いた。初めてだったのだ、母が手を挙げたのは。
僕は衝撃を受けたが、しかしもう後には引けなかった。
母の手を思いっきり振りほどいて、二三歩歩いたとき不意に僕の足は止まった。
突然、体にしびれを覚えた。・・・歩けない。体が・・・重い。僕はその場に前のめりに崩れさった。
喉が焼け付くように痛くて、せき込む。口に手をやると血でべっとりする。頭が鉛のように重くて、その場にうずくまったまま体が痙攣するのがわかった。明らかに僕の病気の最終段階を迎えていたのがわかった。このタイミングで、僕は死のうとしていた。
薄れゆく意識の中で、必死に僕を揺する母がおぼろげに映った。
運命だったのか、僕は最後に思った。今までのあらゆる悲しみも、もう終わるんだと思うと、安らかな気持ちになった。

ありがとう

　僕はすごい高いところに立っている。いやもしかしたら浮いているかもしれない。もうどうでもいいことなのだ。とにかく高いところにいる。
　風景も音もない、ただの空間にいる。無だ。
　僕は死んだのだ。
　これから何処行くんだろう。

　突然、目の前の空間がチャックを開けるようにぱっくりと開いた。誰か出てくるかと思ったけれど、いくら待っても誰も出てこない。
　もしかして僕が入るのかもしれない。僕は足を踏み入れた。
　その瞬間、ひどい寒さが体中駆けめぐった。僕は何かに引きつけられるように、味わったこともないくらい寒い空間に入っていった。
　真っ暗だった。本当に暗い。先が見えない。五里霧中に歩くと、明かりが見えて、ほっとした。
　明かりを頼りに進んでいくとやがてこの暗闇からの出口だった。僕は冷え切った体で、光の中に飛び込むと思いの外暖かくて、とても気分が良くなった。
　そこには、一面、黄色の花が咲き乱れていた。とてもきれいだ。花の上に踏み出して、全体を見回したけれど見渡す限り花である。
　ここは楽園なのだろう。
　花の上で寝ころんでみた。気持ちよかった。僕は幸せな気分になった。
　やがて僕の上に影が現れた。その影は・・・野上佐知子、彼女だ。
　僕は慌てて飛び起きた。彼女は無表情に立っている。まるで能面のようだ。
「会いたかった」
　僕は心から言った。
「・・・・・」
「何かいってくれよ」
「・・・・・」
「おい」
　僕は彼女の肩に触れると、それは氷のように冷たかった。慌てて手を離して、彼女の顔を見た。
　彼女の目からは大粒の涙が出ていた。
　しばらく僕は状況を見守った。彼女はやっと口を開いた。本当に細い声でささやくように。
「私あなたが好きよ」
　おもむろにいった。僕は嬉しかった。でもちょっと気にもなった。彼女のあの口調は、最後に別れた公園のときとまるで同じなのだ。僕は急に心配になった。
「僕たちもうずっと一緒だよね」
「・・・・・」
「なんで黙っているんだ。返事をしてくれよ。僕は心配なんだ。また君がどこかに行ってしまいそうで」
「・・・・・」
「どうしてだまっているんだよ」

「あなたはまだ死ぬべきじゃないわ」
「なに言っているんだ、もう死んでいるよ」
「違うわ」
「違う？」
「あなたはまだ死んでない」
「えっ」
「あなたはまだ生死の淵をさまよっている」
「どうしたら死ねるの？」
　僕が聞くと、彼女はキッと僕を睨み付けた。
「あなたは生きるのよ」
「嫌だよ。ここで一緒に暮らそうよ」
「・・・」
「ずっと一緒にいようよ」
　彼女はまた涙を流して、今度は声を立てて泣いた。しばらく間ができた。
「私も。そうしたいわ。でもね、あなたはこんなところに来て欲しくないの。生きているうちに気づいて、生きていることのすばらしさに」
「僕は疲れたんだ。君だってそうだろ？生きていて何が楽しかった？哀しいことしかなかっただろ？」
「そんなことはない。あなたは気づいてない。自分の幸せに。それにわかってない。ここのつらさも」
「どんなにつらくても、君となら僕は平気だよ。だからもう言わないでくれよ。僕には君しかいないんだ」
「嬉しいわ。私もあなたと一緒にいたい。でも・・・」
「でも？」
「できない」
「どうして・・・」
　彼女はゆっくり口を動かした。
「あなたはまだずっと輝ける人よ。いっぱい輝いて、周りを幸せにする力のある人」
「何を言っているんだよ。僕は死ぬんだ。死んで君と暮らすって言っているだろ」
「ダメよ。あなたはここに来てはいけない」
「どうしてだよ。どうしてそんなこと言うんだよ。」
「わかって。私だってつらいの。死ぬんじゃなかったって後悔した時には・・・もう遅いの。私のぶんまで生きて。私、あなたを見ているから。」
　僕の目の前に涙が溢れて、パッと視界が曇った。

　そのとたん、僕の頭の中で渦が回ったようにいろいろな記憶が駆けめぐって、体全体がふっと軽くなったような気がした。
　僕は目を開いた。

　母の顔がおぼろげに見えた。ここは現実？僕は次第にはっきりしていく風景は、まさに見慣れた病院だった。
　目を真っ赤にはらした母の顔が、ぱっと明るくなった。それからのことはよく覚えてない。先生だの、看護婦だの、いろいろな人が来たようだが、あまり記憶がない。

　僕はまた目を覚ました。やっぱり、母がいた。
「カオル・・・」
　母は一言僕の名前を呼んで、しばらく泣き出した。そんな母をみて、僕は自分のしたことをひどく後悔した。
「ごめんね、カオル」
　僕は首を横に振った。その時、首から下の感覚がまるでないことに気づいた。奇跡的に助かった代償に、半身不随ってところか。不思議と悲壮感はなかった。
　しばらくゆっくりと包み込まれるように僕たちは会話を交わしたと思う。
「いつの日か、あの暑い日。母さんが死にかけていた日に、あなたが父さんのところに行ったこと知っていたの。母さんもうあきらめていたのに、とてもうれしくて。また生きようってがんばってこられたの」
　母はじっと僕の方を見つめて、とても自然に、
「そう、お母さんはね、後悔なんてしたことなんてただの一度もないよ。それどころか、お前がいたから、お前がいたから、母さんもここまでこられたのよ」
　僕の目から暖かい小さな結晶が一筋流れ落ちるのがわかった。

　夜目が覚めて、天井を見た。母は隣で寝息をたてている。そうとう疲れ切っていたのだろう。
　外は月が出ているらしく、室内は心持ち明るい。
　あとどれくらい生きられるだろうか。わからない。でも、生きられるだけ精一杯生きようと思った。
　きっと、ハンディキャップは僕の心にあったのだ。母の顔を見て、彼女の顔を思い出した。「私あなたを見ているから」、どこかで彼女が見ている。
　僕はくすぐったくなって、軽く笑った。明るい月に、幸せそうに寝息をたてる母、僕を見守る彼女。僕は幸せな気分になった。ハンディキャップをのり越えられるような気がして、愉快になったのが、最後に目を閉じるすぐ直前のことだった。

（終わり）